

# "Dr. Heidegger's Experiment" の "Fountain of Youth" と "Father Time" について

長岡政憲

ホーソーンの短編に、“elixir of Life”をテーマとしながらも、愚かな人間の愚行によって人間の本質を洞察する、あまり科学的とは言えない実験を行った、“Dr.Heidegger's Experiment”がある。この作品は1837年1月に、*Knickerbocker or New York Monthly Magazine*に“The Fountain of Yourth”として掲載され、編集者のLewis G.Clarkはホーソーンに賞賛の手紙を書いたようだ。<sup>(1)</sup>この作品で、“Fountain of Youth”という水が枯れた薔薇の花を新鮮な美しい薔薇に蘇らせ、その水を老人4人が飲んだら一体どうなるのか。その結果をホーソーンは教訓めいた短編の中に、“Father Time”という語句を用いて、人間の地上での営みの「時」と“Father Time”を読者にあえて意識させようとしていると思われる。

この論文ではDr.Heideggerが試みる実験を通して、人間の愚行による時間の空虚な時と、ホーソーンが暗示する普遍の時に注目し、この作品のテーマを「時間」としてまとめたい。

この作品の冒頭でDr.Heideggerをホーソーンはとても変人の老博士であると紹介し、この博士が自分の書斎に招くことになった4人の人物、Mr.Medbourne, Colonel Killigrew, Mr.Gascoigneと老婦人のWidow Wycherlyは、皆これまで不幸な生涯を送ってきた、陰気な老人たちである。彼らの不幸は災難や病気などによるものではなく、それぞれの生き方に問題が生じたものであった。Mr.Medbourneは繁栄した商人であったが、

“a frantic speculation”<sup>(2)</sup> で全てを失い、今や乞食同然であった。Colonel Killigrew は “in pursuit of sinful pleasures”<sup>(3)</sup> とあり、自らの健康と財産、人生の大半を浪費し、痛風の苦痛、そして “soul and body”<sup>(4)</sup> に様々な苦みを抱えている。これは情欲の罪の結果と思われる。Mr. Gascoigne は “man of evil fame”<sup>(5)</sup> で、自滅した政治家であったが、今や悪名どころか、彼の存在すらこの世から忘れ去られていた。彼の悪徳のせいだと思われる。Wycherly 未亡人は若い頃は美人であったそうだが、外聞の悪い噂が立ち、長年隠遁生活をして年老いてしまったのである。つまり社会の一員の繋がりのない孤独な存在である。*The Scarlet Letter* で自分の正体を隠し続けた Chillingworth や、“Wakefield” でこの世から蒸発した主人公のように、自ら選んだ孤独な生き方をホーソーンは罪として扱っている故、Wycherly 未亡人も孤独の罪の中で長年生きてきたと言えよう。そして先の3人の老人男性は若い頃、Wycherly 未亡人の昔の恋人であって、かつて彼女のために命を懸けて戦おうとしたことがあったと作者は記している。

Heidegger 博士は4人を自宅の書斎に招き入れ、そこで自分が願う実験に協力してほしいと申し出る。その書斎について、ホーソーンがこの作品に盛り込みたい意図がかなり見受けられるのである。その部屋は暗く古めかしい、蜘蛛の巣が花飾りのようになり、床は塵埃に埋もれている。オーク材の書棚には大きな本がぎっしり詰められ、書棚の上にはヒポクラテスの青銅の胸像が置かれていた。部屋の隅の戸棚には背の高い骸骨が立っており、書棚と書棚の間には大きな鏡があり、鏡の縁は錆び、盛り上がった鏡は埃だらけで、この鏡にまつわる話があった。それは博士の手がけて死亡した患者たちが鏡の縁に住んでいて、博士がそこを見るといつも彼の顔をじっと見ているという話であった。

また部屋の向こう側にこの博士が50年前に結婚するはずであった、若い女性の等身大の肖像画があり、着飾った衣装も色褪せていた。彼女は婚礼の夜、博士の処方した一服を飲みそのまま死んでしまったのであった。そしてこの書斎で最も興味を引くものは、黒革表紙の銀の大きなボタンのついた重

い二つ折り版の本で、背表紙には文字は何もなく、本の書名は誰にも分からず、それは“a book of magic”<sup>(6)</sup>であることは良く知られていた。かつてこの家の女中が埃を払おうとその本を持ち上げたら、あの骸骨が戸棚の中でガタガタ音を立て、若い女性の像は床の上に一步踏み出すし、いくつかの幽霊のような顔があゝの鏡から覗き出し、ヒポクラテスの青銅の頭は眉をひそめ、「控えろ！」と言ったとか。この書斎のゴシックの装具について、

If the Gothic phenomena are taken at face value as the author's attempt to covert magic paraphernalia into moral symbols, Maxwell's charge that “the slight narrative sinks under this weightily manipulated symbolism” appears valid. If , on the other hand, the Gothic devices are interpreted as part of Hawthorne's ironic design, the story takes on a skillful subtlety.<sup>(7)</sup>

と述べられている。

さてこの書斎は、色褪せたダマスクの重いカーテンの間からのみ日光が入り、黒檀の丸い小さなテーブルの上のガラスの花瓶に反射し、5人の灰色の老人を穏やかに照らしていた。Heidegger 博士は4人の老いた友人たちにこれまででも奇妙な実験に付き合わせてきたが、今回は例の魔術の本を取り出して開き、黒体文字の中から、かつては一輪の薔薇の花、しかし葉も花弁も茶色に変色し、ぼろぼろに崩れそうな薔薇を取り上げた。この薔薇は55年前、肖像画となっている花嫁のはずの Sylvia Ward からの贈物で、婚礼の際博士が胸につけようとした薔薇をずっと魔術の本の中に保管していたのである。この半世紀の枯れ果てた薔薇が、再び新鮮で綺麗な薔薇に戻るかという博士の問いかけである。彼は花瓶の中に萎びた薔薇を投げ入れた。最初何も起きなかったが、やがて枯れて潰れていた花弁が動き出し、あたかも死んだ眠りから蘇ったように深紅色は濃くなり、細い茎と葉は緑色になり、55年前の

みずみずしい華麗な薔薇に戻ったのである。老いた男女4人はこれまで手品師の見世物に慣れていたので、あまり驚かなかったが、博士がどうやったのか聞きたがった。博士は、

‘Did you never hear of the “Fountain of Youth”,’ …‘which Ponce De Leon, the Spanish adventurer, went in search of, two of three centuries ago?’<sup>(8)</sup>

と切り出したのである。この“Fountain of Youth”はフロリダ半島の南部、Lake Macacoの近くの水源のもので、知人が送ってくれたものだと言博士は言う。疑い深いColonel Killigrewはこの液体が人間の体にどんな影響を与えるのかと問いかけると、博士はこの水を4個のシャンパングラスに満たして言ったのである。

“Before you drink, my respectable old friends,” said he, ‘it would be well that, with experience of a life-time to direct you, you should draw up a few general rules for your guidance, in passing a second time through the perils of youth. Think what a sin and shame it would be, if, with your peculiar advantages, you should not become patterns of virtue and wisdom to all the young people of the age!”<sup>(9)</sup> (筆者下線)

と言い切った博士には、この4人の老人のこれまでの生涯の愚行が、もう一度若返って再現されるという仮説を抱いて、彼の実験をこの4人に行うという意図が見受けられる。これに対し4人の心の中の反応は、自分たちのこれまでの罪の愚行を顧みようとするものではなく、博士の忠告めいた言葉に彼らの考えは、

…; so very ridiculous the idea, that, knowing how closely repentance treads behind the steps of error, they should ever go astray again.<sup>(10)</sup>

として、彼らは微かな薄笑いをしただけである。

さてこの博士の実験は、作者ホーソーンが確信している人間の愚行性を読者に暗示するために、“Fountain of Youth” という魅惑的な小道具を用い、老人には何ものにも勝る、若返りの願望を叶えさせるという幻想に誘い込むことになる。ホーソーン的确信とは一体何であろうか。人間の愚かさを指摘している箴言に、“As a dog returneth to his vomit, so a fool returneth to his folly.”<sup>(11)</sup>とあり、ホーソーンはこの言葉をこの作品の主題にしてはいないだろうか。

恐らく4人の老人の思いは現実には有り得ない、若返りの博士の実験に、深い考えや洞察もなく、彼らは、

They looked as if they had never known what youth or pleasure was, but had been the offspring of Nature's dotage, and always the gray, decrepit, sapless, miserable creatures, …, without life enough in their souls or bodies to be animated even by the prospect of growing young again.<sup>(12)</sup>

として、この実験の結果の暗い結末が暗示されているのである。

博士の言葉に誘われ、4老人はテーブルの上のグラスを一息に飲み干したのである。彼らの様子には突然の陽気な日差しの輝きと共に、これまで死骸のようにさせていた灰色の顔つきが一変し、紅潮した頬となった。ここでホーソーンは老人4人が生まれ変わったように若返ったこの時に対して、

They gazed at one another, and fancied that some magic

power had really begun to smooth away the deep and sad inscriptions which Father Time had been so long engraving on their brows.<sup>(13)</sup> (筆者下線)

として、魔術の力による“Fountain of Youth”と対比する形で、“Father Time”を組み入れている。さてこの“Father Time”が意味しているものは何であろうか。ホーソーンは“Father Time”を2度使用し、<sup>(14)</sup>さらにもう一度、“gray Time”<sup>(15)</sup>として3度この作品に盛り込んでいる。この“Father Time”とは、老人4人の人生の現実に生きてきた長い時間であり歴史である。言い換えれば、我々人間の生れてからの時間の流れであり、打ち消したり戻ることのできない人生とも言えよう。つまりホーソーンの言う“Father Time”とは、天地創造主が時間を定め、生きとし生けるものに命を与え、時間を与え、その生と死を与えているとしたら、この作品の重い教訓は、読者にも十分に説得力のあるものとなってくると言えよう。歴史がB.CとA.Dに区分され、世界が西暦の年号を使用し、どの時代の個人個人も生命が誕生した時から死を迎えるまで、時間が刻まれ、その齢が死の時まで定められていることになるのである。個々の人間は、mortalな存在で、肉体は時間の制約の中でしか生きられないが、『伝道の書』に「神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。」<sup>(16)</sup>とある。人の魂はeternalな世界を憧憬し、このeternalな世界を扱ったホーソーンの他の作品、例えば、“The Birthmark”のAylmerと妻のGeorgianaの死の直前に交わした会話、そして妻の魂は、“…, and her soul, lingering a moment near her husband, took its heavenward flight.”<sup>(17)</sup>とeternalな世界への旅立ちである。“Rappaccini’s Daughter”では毒の犠牲となったBeatriceが自分の体は毒に染まりながらも、死の直前には愛が芽生えそうになったが、Giovanniの毒牙の言葉に、

“…I am going, father, where the evil which thou hast striven to mingle with my being will pass away like a dream….

Farewell, Giovanni! Thy words of hatred are like lead within my heart; but they, too, will fall away as I ascend.”<sup>(1)</sup>

として、彼女の魂が eternal な世界へと昇っていく様をホーソーンは印象づけている。この地上では個々の人間の生きた時間が “Father Time” として刻まれ、肉体の最期の時まで、人は様々な思いの中で生きてゆく。しかし「時」がいずれ来る。それが絶対的な “Father Time” であり、earthly time と Heavenly Time の「時」があって、eternal な世界の「時」が Heavenly Father の “Father Time” としてホーソーンは暗示してはいないだろうか。

さてこの4人の老人は “Fountain of Youth” の水を飲んだ後、どのような行動であったであろうか。彼らは例の水のせいで、若返っていく自分たちの肉体を見て、もっともっと欲しいと急ぎ立て喚いたのである。博士は彼らの反応を見ながら、再び彼らのグラスになみなみとその水を注ぎ、4人は一気に再び飲み干したのである。彼らの身体に更に変化が表れ、彼らの眼は澄んで明るくなり、白髪の間は黒い色が濃くなり、中年の三紳士と豊満な、ほとんど青春盛りの女性がテーブルを囲んでいた。

まず Colonel Killigrew は美しく若返った Widow Wycherly に眼をつけた。 “…You are charming!”<sup>(19)</sup> と声をかけられた、美しくなった未亡人は恐る恐る自分の顔の変化を確かめようと鏡に近づく。Mr. Gascoigne の心は、50年来の政治上の問題に以前と同じ考えを廻らし始める。彼は今愛国心、国民の光栄、国民の権利などについて喉をからしてべらべらしゃべり出し、

…now he muttered some perilous stuff of other, in a sly and doubtful whisper, so cautiously that even his conscience could scarcely catch the secret;<sup>(20)</sup> (筆者下線)

として、彼の良心の危険で不安定な状態が述べられている。彼はアルコール

の入っていないあの水を飲んで、上機嫌に酒席の歌を歌いまくり、Wycherly 未亡人の豊満な姿へ目を注いでいる。Medbourne 氏はなぜお金の勘定をしていたが、それが氷山の塊を一群の鯨に結び付けて東インド諸島の水を供給するという、途方もない計画と奇妙な具合に関わりがあった。Wycherly 未亡人は鏡の前で、若返った自分の姿にお辞儀をし、にたにた笑い、この世の一番好きな友として挨拶した後、テーブルに戻ってきて更に花瓶の水を欲しがった。グラス一杯に注がれたその水は表面から泡立って、ダイヤモンドの震える輝きのようなものである。Heidegger 博士は、背の高い念入りに彫刻が施された檜の木の安楽椅子に座っており、この幸運な 4 人以外にはその力に抵抗できる筈もない、まさにその“Father Time”<sup>(21)</sup>に相応しい灰色の厳かな様子のままであった。ホーソーンはここで博士を実験者として次のように権威づけて、“Even while quaffing the third draught of the Fountain of Youth, they were almost awed by the expression of his mysterious visage.”<sup>(22)</sup>とし、魔術を行っている魔術師の如く、博士はこの実験の種明かしができるものとして、誑かされている 4 人を威厳をもって見据えていると思われる。ホーソーンはこの青春の水を飲んだ後に起こった変化を、“Was it delusion!”<sup>(23)</sup>とか“… in such a manner, as proved that the water of the Fountain of Youth possessed some intoxicating qualities”<sup>(24)</sup>として明確にはしておらず、非現実の時間と空間である印象を与えていることを確認すべきである。

彼ら 4 人にとっては次の瞬間、若い生命の生気が血管に流れ込み、(その魂の新鮮な光も早く消えてなくなり、これが無くなったため、世の中の次々に起こる光景が、単に色褪せた絵画の美術館となっていたが、) 彼らは陽気な若者となり、溢れる青春の喜びに狂喜しながら、

The most singular effect of their gayety was an impulse to mock the infirmity and decrepitude of which they had so lately been the victims. They laughed loudly at their old-fashioned



attire,...<sup>(25)</sup>

と描かれている。すっかり若返った4人は自分たちの古い衣服を嘲笑した後、故意に痛風老人の仕草や、黒体文字の魔術の本を夢中に読むふりをし、博士の威厳を真似ようとした。Wycherly 未亡人は老いている博士を愚弄し、一緒に踊って欲しいとせがんだ。青春時代に戻った3人の男たちは、一斉に若い Wycherly に駆け寄り、一人は彼女の両手を掴み、一人は彼女の腰に腕を廻し、三人目は彼女の帽子の下をつやつやした巻き毛に手を差し入れた。彼女は真っ赤になり、もがいてたしなめ、笑いながら3人の男たちのなすがままに捕まっていた。ここでホーソーンは、丈の高い鏡が彼らの老いた現実の姿を映し出しているとして、

Yet, by a strange deception, owing to the duskiness of the chamber, and the antique dresses which they still wore, the tall mirror is said to have reflected the figures of the three old, gray withered grand-sires, ridiculously contending for the skinny ugliness of a shrivelled grand-dam.<sup>(26)</sup> (筆者下線)

と軽蔑的な grand-sires と grand-dam を用いている。4人の表面上の老いより更に酷い、内面の醜態を外の鏡が映し出していたと言えよう。

青春の水のせいで、若返った情熱が炎のように燃え、3人の男たちは豊満な若い女性の艶かしさに夢中になり、お互いの喉を掴み合い威嚇しあったのだ。お互いに押し合いへし合いしているうちに、テーブルはひっくり返し、花瓶は粉々に砕け貴重な水は床に流れた。博士が4人の醜態を戒めた様は、

They stood still, and shivered; for it seemed as if gray Time were calling them back from their sunny youth, far down into the chill and darksome vale of years.<sup>(27)</sup> (筆者下線)

として、ホーソーンはこの4人を現実の暗い老人の世界へ戻すことになるのである。例の花瓶に入っていた薔薇は見る見るうちに萎んでゆき、かさかさに干からびてしまった。Heidegger博士は萎びた薔薇に自分の萎びた唇を押し当て、*‘I love it as well thus, as in its dewy freshness,’*<sup>(28)</sup>と語ったのである。これは生きとし生けるもの、そして人間の齢を刻んでいく“Father Time”を、長年畏敬の念を抱いて、その日その時を過ごしてきた者が言える愛すべき言葉であろう。

4人の老人には肉体のものとも精神のものとも知れない異様な悪寒が次第に忍び寄ってきた。顔を見合わせたお互いの顔は、一瞬一瞬美しさと若さが消え始め、更に以前よりも一層深い皺ができそうだと4老人は心配した。この若返りは一種の幻覚、幻想であったのだろうか。彼らは忽ち再び醜い老人に戻ってしまったのである。ホーソーンは明確に、

“The Water of Youth possessed merely a virtue more transient than that of wine. The delirium which it created had effervesced away.”<sup>(29)</sup>

と実験の結果を老人4人を通して読者に語りかけている。Wycherly 未亡人は皮だけの両手を顔の前で覆い、美しさが戻らないその顔を棺の蓋で早く隠したいと願うのであった。そしてHeidegger博士はこの老醜の4人に対し、

“Yes, friend, ye are old again,” said Dr. Heidegger ; and lo! The Water of Youth is all lavished on the ground. Well—I be-moan it not; for if the fountain gushed at my very door-step, I would not stoop to bathe my lips in it—no, though its delirium were for years instead of moments. Such is the lesson ye have taught me!”<sup>(30)</sup>

と宣言し、この教訓が愚かしい4人の老人には理解できる術もないこと、そしてこの4人は直ちに博士の言及したフロリダへ旅立ち、朝も昼も夜も“the Fountain of Youth”をガブガブ飲もうと決心したのであるとして、この作品は結ばれている。

イエスがガリラヤへ行く途中、サマリアでの女との語らいで、井戸の水を女に求めた折に、

Jesus said to her, “Every one who drinks of this water will thirst again, but whoever drinks of the water that I shall give him will never thirst; the water that I shall give him will become in him a spring of water welling up to eternal life.”<sup>(31)</sup>

として、この地上の水とイエスが与える水の違いが別の形で想起される。

元来長い人類の歴史の中で、古代文明以来、“elixir of life”の願望は、古今東西より永遠に続いてはいるものの、その願いは空しく散り続けている。ホーソーンの「時」のテーマは、このearthly timeの個々の人間の生命の「時」と、eternal Timeつまり、“Father Time”との断絶をこの作品でも暗示しているように思われる。

## 注

- (1) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*, (Boston; G. K. Hall & Co, 1979), p.65
- (2) Nathaniel Hawthorne, *Twice-told Tales*, ed. William Charvat and Others, (Ohio State University Press, 1974), IX, p. 227. 以下こ

のテキストを *T.t.T* と略す。

- (3) *Ibid.*, p.227.
- (4) *Ibid.*, p.227.
- (5) *Ibid.*, p.227.
- (6) *Ibid.*, p.229.
- (7) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Story of Nathaniel Hawthorne*, (Boston; G. K. Hall & Co, 1979), p.68.
- (8) *T.t.T.*, p.321.
- (9) *Ibid.*, p.232.
- (10) *Ibid.*, p.232.
- (11) Proverbs. 26:11. (Authorized King James Version による。)
- (12) *T.t.T.*, p.232.
- (13) *Ibid.*, p.233.
- (14) *Ibid.*, p.235.
- (15) *Ibid.*, p.237.
- (16) 伝道の書3章11節(日本聖書協会、口語訳聖書)
- (17) Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, ed. William Chavat and Others, Ohio State University Press, 1974), X, p.56.
- (18) *Ibid.*, p.127.
- (19) *T.t.T.*, p.233.
- (20) *Ibid.*, p.234.
- (21) *Ibid.*, p.235.
- (22) *Ibid.*, p.235.
- (23) *Ibid.*, p.233.
- (24) *Ibid.*, p.234.
- (25) *Ibid.*, pp.235-236.
- (26) *Ibid.*, pp.236-237.

- (27) *Ibid.*, p.237.  
(28) *Ibid.*, p.238.  
(29) *Ibid.*, p.238.  
(30) *Ibid.*, p.238.  
(31) John. 4: 13, 14. (The Holy Bible. Revised Standard Version)

### 参考文献

- Mellow James R. *Nathaniel Hawthorne in His Time*, Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1980.  
Fossum Robert H. *Hawthorne's Inevitable Circle: the Problem of Time*. Deland, Florida: Everett/Edwards, inc., 1972.  
Easton Alison. *The Making of the Hawthorne Subject*, Columbia and London: University of Missouri Press, 1996.  
Von Frank Albert J. *Critical Essays on Hawthorne's Short Stories*. Boston: G. K. Hall & Co, 1991.